

あいわヒューマンブックス

檜野里夫

こぼれる愛を いまも

壮烈な死を遂げたある消防士の記録



4

〈著者紹介〉

檀 野里夫 (ひのき のりお)

1944年 福島県会津若松市生まれ。

明治大学文学部卒業。

日本作家クラブ会員。ノンフィクション作家。

著書に、「おかあさん 命をありがとう」「いのち
燃えつきても」「あふれる光の中で」(以上集英社
コバルト文庫刊)「かあちゃん、ぼくを生んでく
れてありがとね」(秋元書房刊)などがある。

こぼれる愛をいまも

1984年2月15日第1版第1刷発行

1984年3月10日第1版第2刷発行

1984年3月31日第1版第3刷発行

1984年4月25日第1版第4刷発行

著 者 檀 野里夫

発 行 者 山 中 洋 二

発行所 株式会社 あ い わ 出 版

東京都千代田区三崎町2-10-5 土本ビル

電話 東京 (264) 2632

印刷所 株式会社 東 洋 企 画

製本所 株式会社 三 森 製 本 所

檜野里夫

こぼれる愛を いまも

壮烈な死を遂げたある消防士の記録

こぼれる愛をいまも ● 目次

プロローグ	7
-------	---

第一章 旅立ち	17
---------	----

消防学校入校

人々を守る仕事につく！

正義感が強い子

優しさと責任感

第二章 活躍	47
--------	----

第二小隊警防員

辞職？ この仕事からは逃げないよ

「人間の評価は、死後にこそわかる」

消防艇勤務

第三章 晴れの日	75
----------	----

はしご隊勤務

第四章

おれは福島のプレスリー!?

出会い

八時半の男

「男の城」取得

新しい家

「妹」です

結婚とは同じ墓に入ること!?

ホテル・ニュージャパン火災にも出場

晴れの日

沖縄・石垣島への新婚旅行

おれがおやじに!?

暗転

いつもと同じ朝

最後のラブコール

火災発生! 出場!!

四人救出！　そして……転落
深夜の悲報
悲しみの「お守り」

第五章

新しい命

ノド仏

学さんのところへ行く！

利根町から福島へ

壮烈院釋天士

まり子誕生

エピソード

あとがき

195

225

装幀

アルファデザイン

プロローグ



木々の間からさしこむ秋の薄日が、やわらかく頬をなでる。

咳ひとつ聞こえない静寂のひととき。正装に身をかためた警視庁音楽隊の奏でる曲が、静かにそしておごそかに会場をつつむ。

東京の中心、宮城の北方にある北の丸公園の一隅に祀られている「弥生慰霊堂」(前年までは「弥生廟」と呼ばれていた)で、この日、昭和五十八年十月十三日、恒例の例大祭「合同慰霊祭」が執り行なわれていた。

田安門をくぐった左手、牛ヶ淵をのぞむ高台にあるここからは、外濠の向こうにビルの群れが見え、せわしく行き交う人々の動きや車の列が見える。しかし、その雑踏はここまでは届いてこない。時折り、小鳥のさえずりが、参列した人々の耳に響く。

だが、遺族席最前列に座る故佐藤学(さとうまなぶ)の妻、利江(りえ)には、そんな小鳥の声は聞こえなかった。

新婚三か月にも満たないあの日——そう一年半まえの初夏、突然おとずれたあの時から、何度そでを通した黒の喪服だろうか。そでを通すたびに、悲しみが新たになり、ひとりでに涙が目にあふれてしまう——。

「弥生慰霊堂」は、首都の治安と、市民の生命、財産を守ることを使命として、その仕事に職を賭する、警視庁、東京消防庁、皇宮警察本部、関東管区警察局、警察庁東京都警察通信部の職員およびこれに準ずる職員で、不幸にもその職に殉じた人々を祀るところである。毎年秋の、決まったこの日に、遺族や関係者が参列して慰霊祭が開かれる。

ここに祀られている殉職職員は、明治の時代から通算して、総数二、四四八柱にのぼっている。五十八年は警視庁の若い警察官が一人、新たに職に殉じた——。

白い菊に飾られた、小さな慰霊堂に、殉職職員名簿が奉納され、参列者全員が黙禱もくとうのあと、警視總監、消防總監など関係官庁、団体の代表の追悼の辞……と続く。

利江は、うつむきながらそれらの言葉を聞いた。一年前のこの日も、利江は遺族として参列するように招かれていたが、ちょうど最愛の遺児・まり子を出産して六日目であった。

「学さんのために、出席したい」という願いはかなえられるはずもなく、学の両親や兄、姉たちとその思いを託して、式には欠席したのであった。

一年後のこの日、利江はその最愛のまり子を伴って福島から上京した。一歳になったばかりの

まり子は、ひとりで動き回りたくて、手を放すと、ニコニコと笑いをふりまきながら、よちよち歩きを続ける――。

式は遺族の献花へと移り、この年ただ一人の殉職者、警視庁警察官の、残された若い妻がまっ先に名前を呼ばれ、慰霊堂の前へ進み出た。

利江は、その人のそばで（がんばりましょうね）と声をかけたい思いだった。同じ立場にある妻として、そう思わないわけにはいかなかった。

続けて「東京消防庁、故佐藤学氏夫人、佐藤利江殿――」と呼ばれた。

この年、消防職員で殉職者はいなかった。したがって、一年前と同じく、消防職員ではいちばん新しい殉職者だったからである。

利江は、喪服のすそを直し、愛児・まり子を抱いて前に進み、白の菊の花を受け取ると慰霊堂に頭を垂れた。母親・利江が体を曲げると、胸に抱かれたまり子も、礼拝をしているように体が揺れた――。

参列者の間から、幾多のささやきが聞こえた。

「大きくなったのねえ」「よかったわねえ……」

学の殉職はマスコミでも大きく報ぜられた。

なによりも、その壮絶だった殉職の状況と、それにも増して新婚三か月にも満たない日の悲し

い出来事であったこと、利江のけなげな様子や、その後まり子が誕生した明るいニュースなどど……。だから多くの人々の記憶から、学と利江、そしてまり子ことは消えることはなかった。いま、目の前に利江と、無邪気に笑うまり子の姿を見て、人々は安堵の声をあげたのであった。利江は頭を下げながら、心の中で亡き夫に語りかけた。

（学さん、まり子を見てください。こんなに大きくなりましたよ。これから、私とまり子と、そしてすべての人々を見守っていてくださいね）

合同慰霊祭には、利江とまり子の他、亡き学の年老いた両親、佐藤俊一・キヌエや利江の母親・安井トシイのほか、学を実の子どものように愛していた姉夫婦や叔母もいっしょに上京した。そして、一同を迎えたのは、学が最期のとき勤務していた東京消防庁臨港消防署の今関實雄署長のほか、月島出張所の二部中隊・矢葺康治中隊長をはじめとするかつての同僚たちであった。

矢葺たち同僚はじめ消防関係者の、あのとき以来、折りに触れての細やかな心くばりには利江をはじめ、遺族は感謝するばかりだった。

この日も署のマイクロバスを一台都合し、一行の送迎を受け持っていた。

あのとき学と一緒にしごと小隊員として出場し、不運にも学の最期の瞬間を自らの目で確かめなければならなかった、はしごと小隊・二番隊員の寺田昭治、そして地上ではしごの操作を担当した

機関員・青木幸雄、それに部は違ったが学とは消防学校同期生で親友の平山和成……。彼らは、学が不慮の死を遂げたときから、利江や学の両親たちを陰に陽に励まし続けてきたのだった。

年に一度の合同慰霊祭に併せて、弥生慰霊堂がある北の丸公園内の日本武道館では、警視庁や消防庁関係各署対抗の、柔・剣道の奉納試合が行なわれていた。その試合見学もそくさと、利江をはじめ上京した一行は、マイクロバスで、渋谷区西原にある消防学校へと急いだ。

「まり子ちゃん、まり子ちゃん」

バスの中で、寺田や平山が、学の遺児・まり子に声をかける。まり子は何か言うように笑顔をみせながら利江の胸の中で躍った。まるで、父親にあやしてもらってうれしがるように。

まり子はいま、父親がこの世にいないことを知らない――。

この日、消防学校まで足をのびしたのは、利江の希望だった。学の亡きあとも、利江はまだ、学が消防士としての基礎教育を受けた消防学校をのぞいたことはなかった。

「とっても厳しいところだったよ。だけど、楽しい時代でもあったなあ」

学がそんなことを何回となく言って、学校の様子を話してくれたことがあった。今回の上京の際、どうしても、その消防学校を訪れてみたいと思った。

校門を入ると校庭がある。訓練塔だという高い建物も目に入った。縄ばしごが架かっている。校舎の手前に講堂があり、その階下はポンプ車やはしご車などが並んでいる。

校庭を、訓練中の、若々しい消・防・士・の卵たちが、きびきびとした態度で通り過ぎる。学より何年後輩になるのだろうか。どの表情も、ふっと学の横顔と二重写しになる――。

「なんだ、訓練を見に来たのか――」

学の、照れたような表情と、独得のしわがれ声が耳に聞こえたような感じがして、利江はそばのまり子を抱きあげた。

校門を入った左手に、この学校の象徴ともいうべき防災像の顕彰碑（通称「消防士の像」）の銅像がある。防火服を身にまとい、ホースをしっかりと握って一点をみつめる姿は、いかにも凜々しい。その像は、学のありし日の姿にも見えた……。

碑文にはこううたわれている。

防災は国運の隆盛と民生安定の礎石である

消防は不時の災害に備え

予防と警戒鎮圧を本来の任務とする

一旦 人の災厄に遭うや自ら身命を惜しまず

その任につき奉仕の真を尽す

これ人類の最高の姿である

ここに東京消防庁独立以来、幾多の災害と闘い

その職に殉じた英霊の勲功を讃え

職員の総意をもって顕彰碑を建立し

消防精神を顕揚せんとするものである

そして、その銅像の台座の石には、東京消防庁関係でこれまでの殉職者の名前がずらりと刻まれている。

その一番最後の行は――

「消防司令・佐藤 学 昭和五十七年五月六日殉職」とある。

それを見つけると利江は、その場にまり子を連れて行き、しゃがみこんだ。見つめているだけで涙がまた目にあふれてしまう。

学の母親・キヌエもまた、彫られた文字を何度も何度もなぞりながら、しゃくりあげ、しゃがみこんでその場で手を合わせた。目を、その文字にくつつけるようにして、なめるように手でなぞる。

「学、こんなことになるとはなあ……。熱かっただろうね。苦しかっただろうね……」
母親・キヌエの声は小さくくぐもるように、いつまでも続いた。

母親・キヌエが、この顕彰碑と、そして台座に彫られた学の名前に対面するのは初めてではなかった。ちょうど一年前のこの日も、慰霊祭を終えてから父親・俊一たちといっしょに訪ねている。

俊一は、そのとき十余年前に、学の消防学校入学式につきそって初めて校門をくぐったときのことを、つい昨日のことのように感慨深く思い出していたのだったが、そのときもキヌエは学の名前を見つけて、同じように何度もなぞり、涙を流し続けた。

時を経ても、親の、亡き息子を思う心は変わりはない。涙にくれるキヌエに、父親・俊一をはじめ、案内役をかって出た同僚の矢葺や青木たちも、沈痛な思いでそれをみつめていた。

利江も言葉に出したい思いはたくさんあった。しかし、利江はまり子をしっかりと抱いて、無言で亡き夫の名前をみつめるだけだった。

まり子が、おさえこまれていることを嫌い、利江の手をふり払うように、まだよちよちながら、勢いよく走り出して行く。利江はそれを追いながら、つとめて明るい笑顔を見せた。

（学さん——。とってもつらくて、寂しい年月でした。でも、見て、まり子もこんなに大きくなりました。これからもうずっと、私たちを見守っていてね）

利江は、広い消防学校の校庭を、まり子と走り続ける。明るくはずんだ母と子の声が、いつまでも響いた——。